

絵本三昧

(4) 絵本をあそぶ

宮地 敏子

「おとなは、だれも、はじめは子どもだった。(しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもない。)」けれども、絵本がおとなに働きかける力は、魂を揺るがすといっても過言ではない場合がよくある。BIBLIOTHERAPY (読書療法) に関心をもつきっかけともなったように、外見は一人前のおとなを子どもの中の自分に戻し、成長の過程を自ら辿り直すようなことさえ、絵本はさせる。お

となでも絵本を読んで善い方に「変わる」のだから、子どもたちにとってはもっとプラスの、喜びの「体験」となるに違いない。嬉しいことに学生の教育実習や卒業後の保育実践で、絵本を子どもたちと読み合ったり、絵本を作ったり、絵本から発展してあそんだりしたことを報告してもらう機会には恵まれてきた。そのなかから、いくつかの例をあげて、「絵本をあそぶ」という話をしたい。

なぜ、「絵本であそぶ」や「絵本とあそぶ」にしないかというと、「で」「や」とには、手段や距離を感じるが、子どもは絵本を「丸ごとあそぶからだ」。

五、六年前、アメリカの保育学会に参加したことがある。そのとき『STORY S-T-R-E-T-C-H-E-R-S Activities to Expand Children's Favorite Books』(Raines and Canady Gryphon House, Inc.) という本を手にした。従来から、子どもたちが読み聞かせしてもらった後、あそびのなかに『三びきのやぎのらがらどん』ごっこや『おおきなかぶ』ごっこが自然に生まれるのは知っていたが、この本では、絵本の内容を文字通りストレッチして、子どもたちと楽しむ教育方法を提示している。

例えば、『はらべこあおむし』。工作・薄紙を用意し、いろいろな色を塗り、自分のちょうちよを作る。料理・リンゴ、梨、プラム、イチゴ、オレンジ

を用意し、「あおむしのおやつ週間」と銘打って、曜日ごとに果物を変え、子どもたちに洗わせナイフで切らせる。図書コーナー・日本流にいえば、保育室の壁にパネルシアターを用意し、子どもたちが自由に絵本の話のパネルを使って繰り返し返せるようにする。算数・工作用紙に自分の手を描かせ切り抜く。その上にあおむしを這わせた子はあおむしの絵を描き、描きたくない子は白のまま。その数の多い少ないを比べる。自然科学・実際にあおむしを飼育箱で飼う。飼った後で、再び算数のときにやったことを繰り返し、前回と比べる。

絵本によっては、異国の衣食住や音楽にストレッチさせたり、時代をさかのぼるようにストレッチ



する例も数多く提示してある。これは、現在小学校の総合的学習の時間に、絵本を多角的に使用する手法とそっくりだ。絵本であそぶとか絵本とあそぶには、とてもヒントになる本だ。

もちろんこういう本で知識を得て作られた実践、参照し模倣した実践でも子どもが楽しそうに遊ぶ姿はあるだろう。しかし、子どもたちと触れ合う中で生まれ出てきた、絵本をあそぶ実践を私は貴重に思う。卒業生たちは、子どもたちが「もう一回読んで！」と繰り返し喜ぶ絵本を元にして、あそびの援助をしている。子どもに表れたその絵本が楽しかったというサインを鋭くキャッチして、次のあそびへの創造を誘っているのだ。絵本をあそぶ主体はいつも子どもだ。

『イエベはぼうしがだいすき』（文化出版局編集部 文、石亀泰郎写真）は、読み聞かせた後、子どもたちが自分の帽子を作りたいといったので、かぶりた

い帽子をそれぞれ考えて作った。色とりどりの、またいろいろなデザインの帽子ができた。この実践をした卒業生が仲間へ伝え、その保育者も同じように、子どもたちと帽子作りに熱中した楽しい時間もてたのだった。

『わたしのワンピース』も、読み聞かせから製作の時間に発展する。保育者がうさぎさんの顔とワンピースの外側の線だけを画用紙に拡大コピーしておく。それに自分の着たい模様を描く。もっと拡大して、貫頭衣を作ったクラスもある。

絵本から劇あそびに発展する例はいくつもある。『スイミー』『てぶくろ』『ないたあかおに』『おおかみと七ひきの子やぎ』『もりのなか』などを生活発表会や学年末の会など発表の場に向けて、脚本を考えたり、役割を考えあつたり、練習を重ねていく園もあった。

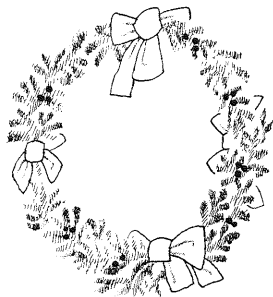
子どもたちのリクエストで『ねこのくにのおきや

くさま』（ウエッタシンハ、シビル作 松岡亨子訳 福音館書店）を繰り返し読んだあるクラスでは、先生と子どもたちで台詞を考え、音楽を先生がチャイコフスキーの「くるみ割り人形」などからつなぎ合わせ、ひとつの劇にまとめあげるのに四か月をかけた。音楽や踊りのないねこのくにに、それらをもたらしたのは仮面をかぶったねずみだったという話。絵本を読んでもらうだけではなく、劇にまとめ上げていく過程で、台詞を言い、そのものになって演じることで、ねこやねずみの置かれた立場が分かり、音楽が入り踊りを振り付けることで内容がより具体的に理解できたに違いない。絵本を体ごと感じるあそびだった。

卒業来ずっと、絵本を保育実践の一つの柱として
いる者もいる。毎日、昼食前に静かにさせるため、
またバス待ちの時間を埋めるために読むのではな
く、自分で子どもの様子を見ながら作ってきた年間

の絵本リストに従って、読み聞かせタイムを作っている。そして、昨年度末には、年少組の二十二名がみんなで『ぴよちゃん』という絵本を二十二冊作った。今年は高齢者の施設を尋ねたことが印象に残ったのか、年長組は昔話を作ったという。

「絵本をあそぶ」実践の報告をしてくれる卒業生の多くは、学生時代に『ぐりとぐら』（中川季枝子作 山脇百合子絵 福音館書店）を上演する選択授業を履修している。学科全体大学事務局さらに実習協力園の協力があつて成り立ってきたもので、今年で十年を迎えた。私は昨年
の途中から担当を
離れているが、脚本
と製作に関わってき
た。脚色や音楽をで
きるかぎり入れない
で『ぐりとぐら』を



絵本の雰囲気そのままに劇化するというのが、原作者の意向であった。書いた脚本に直接朱を入れて下さっただけあり、子どもたちは絵本がそのまま立体化したように思っただけ帰るようだ。寺島尚彦作曲の音楽も、絵本の歌詞のみでわずかに二曲。観劇した子どもたちは、帰りに「ぼくらのなまえはぐりとぐら」と口ずさんで帰る。

さて、この『ぐりとぐら』の絵本を丸ごとあそぶ体験をしてきたのは、他ならぬ学生たちではないかと思っている。四十年近く子どもたちの高い支持をえてきた絵本から読み取れるメッセージは数多くある。練習により、これらが血肉となり、森の生き物はどんな小さなものでもかけがえないのと同じように、どんな小さな役でも大切であること。仲間と協力し合うことで得られる深い充実感。そして、観客の子どもたちとの共鳴がないと盛り上がらないこと。現実化したファンタジーで絵本をあそぶ体験を

した学生は、絵本の重要性をこのひとつの作品からだけでも、十二分に感じ取って卒業するようだ。

あるとき、『あおくんときいろちゃん』（レオ・レオニ作 藤田圭雄訳 至光社）をいくつかの幼稚園で読み聞かせてもらったことがある。ある園では、色水遊びに発展した。またある園では抱っこごっこになった。そしてある園では、ちょうど『三びきのやぎのらがらがらどん』を読んでいて、まるで関心をもたれなかった。優れた保育者は子どもたちが絵本を自由にあそぶのをゆとりをもって貴んでいる。

（洗足学園短期大学・デリー大学）

*よく知られている本については、著者名、出版社名は略しました。